



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報 第12号



GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2014年3月24日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

歴史の重みと歩みの軽やかさ

黒田 卓

(国際文化研究科同窓会会長・イスラム圏研究講座教授)

同窓生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。昨年度の会報劈頭にも記したことですが、本研究科は平成25年度で創立20周年を迎え、ひとつの区切りを刻するとともに、上の階へと歩を踏み出す、いわば階段の踊り場に差しかかったといえます。この節目の年に、20周年の記念行事を挙げるべく新年度早々から実行委員会を立ち上げ、一連の行事の基本コンセプトに始まり、企画の立案や運営・実施のための種々の実務作業などに、企画・運営コーディネータの山下博司教授はじめ実行委員の教員、事務方の皆さま、そして当日は研究科の学生も加わって、献身的に携わっていただきました。そうした多大なご尽力・サポートにより、昨年11末に開催された創立20周年記念行事を成功裏に終えることができました。改めて謝意を表すと同時に、各方面の力が結合したときの研究科の「底力」を実感することができました(記念行事の詳細については本会報の特集記事をご参照ください)。

こうした行事の準備過程においてもそうでしたが、とくに記念行事のイベントに直接参画した折に、つくづく痛感するのは「歴史の重み」ということです。もとより時間に物理的な重量はありませんから、歴史の軽重を論じるのはナンセンスかもしれません。しかし、ひとは往々にして「歴史の重さ」を問題にします。歴史が現在や未来を縛るある種の「桎梏」として、あるいは積み重なる伝統の「重厚」さとして、1世紀をゆうに超える東北大学の重厚な伝統の中で、駆け出し部局の20年はたしかに「桎梏」でもないし「重厚」といえるほどではないでしょう。この研究科とともに歩んできた者にとってはしかし、静かに降り積もる晩秋の落葉のように、日ごろは意識しないが、振り返ってみるとそこに年々歳々積み重なってきた教育研究の営みという「歴史の重み」に気づくのです。

記念行事の当日、舞台に並んだ、本研究科で研鑽を積み、いまや第一線で活躍する修了生のパネリストやコメンテータの顔ぶれを見て、また彼ら彼女らの刺激的で、学際的かつグローバルな内容をもったプレゼンテーションやコメントを聞くと、「歴史の重み」が眼前に展開しているかのような錯覚に陥ります。20年の間に、

この研究科に集った教員や学生が日々一葉の落ち葉を積み重ねてきた教育研究の歩みが、決して無駄ではなかったし、否大なる果実をつけているのではないかと、こういう感慨が私を捉えて離しませんでした。当日記念シンポジウムを支えてくださった修了生だけでなく、彼ら彼女らの背後には国内外の社会の最前線で仕事をしている数多くの同窓生がいるし、本研究科を担ってこられた先達の教員や事務職員がおられる—この「歴史の重み」の上に同窓会は成り立つのだ、との想いを深くしました。

記念講演や記念シンポジウムの中で提起された問題は、国際文化研究や本研究科の行く末にとっても大変示唆的なものでした。グローバリゼーションの進展やそれが含意する正負の側面を十分弁えつつ、国際文化研究科は未来に向けて「軽やかな歩み」を続けたいという思いを新たにしました。それは決して軽佻浮薄という意味ではなく、相対的に若い部局として重い伝統やしきたりに束縛されない、しなやかで、したたかなステップの意味で。

本会報の最終頁にもありますように、次の号から同窓生相互の親交や情報の交換を図る目的で、同窓生の手になる「コラム」の欄を設けようとして計画しております。近況報告や情報伝達で構いませんので、同窓生の皆さまの積極的なご投稿をお待ちしております。また、この「コラム」の愛称・タイトルなども応募しております。なにかアイデアがございましたら、事務局のほうまでぜひご一報ください。

第12回同窓会総会と講演会のご案内

第12回同窓会総会と同窓会講演会を次のとおり開催します。またこれに引き続き国際文化研究科平成25年度修了祝賀会が開催されます。同窓会会員の皆さまにはどちらにも奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：2014年3月26日(水) 15時～

* 研究科学位記伝達式に引き続き開催しますので、会員の皆さまは14時20分の学位記伝達式からご臨席ください。

場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール

講師：鶴田 祐紀氏

(東洋電機製造株式会社 研究所 技術研究部 次世代調査研究所・科学技術交流論講座 前期課程修了)

演題：「企業に「就職」し「研究」するということ」

国際文化研究科同窓会事務局

第11回総会と講演会の報告

第11回総会を2013年3月27日にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにて開催しました。総会に先立ち、沈 恵芬氏による講演会を開催しました。

講演会要旨

「私のキャリアプランについて」 セイコーインスツル株式会社 水晶事業部水晶営業課 沈 恵芬 (言語科学基礎論講座前期課程修了)

今度同窓会に「私のキャリアプランについて」を話すチャンスをいただきまして、自分にとって貴重な経験でした。

まずは自己紹介をさせていただきます。勤め先は時計や電子部品などを作っているセイコーインスツル株式会社で、私は電子部品の水晶振動子の国内営業として、国内の6社代理店のうちの3社を担当しています。新規顧客の開拓から、現行顧客のフォロー、アフタサービスなどが主な仕事内容です。営業は様々な人と話すことができるので、自分にとって、非常にやりがいのある仕事です。

次に私の就職活動について話したいと思います。私は就職活動を2010年10月から2011年5月(震災後2ヶ月)までしました。就職活動は人を成長させるし、自分はどのような人なのか、将来なりたい人物像などが就職活動の中で回答が見つかります。人生の中の貴重な宝物です。

私の就職活動は主に以下の流れで進んでいます。

<就職活動の準備段階>

①自己分析 10月～11月

方法： ◆キャリア支援センターを利用する
◆先輩意見を聞く(先輩の)
◆セミナーに参加する

内容： ◆自分の強み・弱み
◆研究内容・学生時代に力を入れたこと
◆学生時代に直面した困難
◆日本へ留学する理由(留学生)
◆将来なりたい姿

②合同説明会@10月～11月

会社説明会@12月～

リクナビ、マイナビ、日経就職ナビに登録@10月～
企業研究： ◆「自分が目指す企業とはどのような仕事をやっているのか」

業界研究： ◆「自分が目指す業界にはどのような企業があるのか」

企業研究： ◆経営理念 ⇒会社の価値観は自分の価値観と合致するかどうか
◆求める力・人物像
◆OB・OG訪問

※注意点：過剰に情報に踊らされないように

③筆記試験(SPI、玉手箱など)の準備@11月

内容：言語(国語)、計数(数学)、一般常識(社会・

理科・時事経済・英語)、性格

方法： ◆問題集も練習する。

- ◆興味ない(興味の無い)企業のWEBテストを受けて、自分の問題集を作る
- ◆企業ごとの試験内容を研究する。

④履歴書やエントリーシートの準備 11月～
自己PR、研究内容、志望動機、資格、趣味
※手書きの場合、字をきれいに

<内定までの流れ>

①会社説明会&1次選考 1月

選考内容：

- ◆履歴書(志望動機、自己PR/強み、研究課題、資格)
- ◆筆記試験(SPI) 数学、算数/国語、漢字
形式：マークシート

②2次選考(個人面接、グループディスカッション)
2月22日

選考内容： ◆個人面接 5分間
(自己PR、志望動機、研究の内容)
◆グループディスカッション

③3次選考(専門面接、適性検査) 3月10日

選考内容： ◆専門面接(各部門長との面接)
◆適性検査

④最終選考(人事面接) 5月5日

選考内容： ◆志望動機
◆自分の欠点
◆大学時代以外で達成感を感じたこと
◆会社に入ってやりたいこと(分野)

⑤内定 5月12日

※内定者の経験談と就活生の口コミサイト「みんなの就職日記 <http://www.nikki.ne.jp/>」は非常に参考になりました。

<内定後の手続き>

- ◆入社誓約書 5月
- ◆事業見学会・内定者懇親会 6月
- ◆内定者研修(自己理解・相互理解) 8月
- ◆就労ビザの変更
- ◆引越しの準備

最後ですが、就職活動にあたって、自分にとって肝心だということを話したいと思います。

◆日経新聞を読むこと

毎日読むのが難しいと思いますので、とにかく継続的よむことです。業界の話をよく知っていると、面接のときに有利だし、自分に最適な企業も見つかると思います。

◆しっかり自己分析して、最適企業に入社することです。

◆就活生の友達を作る

就職活動を続ける時間が長いので、つまらないとき、落ち込むとき、同じ気持ちに分かっている友達がいれば、もっとがんばれるので、最後まで就職活動を続けます。

就職活動は思い通りにならないこともたくさんあると思います。最後まで頑張ればだれでも就職できると信じています。

東北大学大学院国際文化研究科 創立20周年記念行事の報告

創立20周年記念行事（記念式典、記念講演、記念シンポジウム）を、2013年11月29日（金）に、東北大学川内百周年記念会館会議室にて開催しました。

研究科創立20周年記念行事の概要

山下 博司（国際環境システム論講座教授）

国際文化研究科創立20周年記念行事が、昨年（平成25年）11月29日（金）午後14時30分から18時20分まで、本学の百周年記念会館会議室にて盛大に挙行された。私は創立10周年記念行事の折にも記念フォーラムのコーディネータとして人選やプログラムの立案等に関わった経緯があり、今回も同様の役割で企画・運営に参加することになった。記念行事全体は前半の記念式典と後半の記念講演・シンポジウムから成っており、直接的に私が構成したのは後半部分であったが、全体の企画を練り実行に移すための記念行事実行委員会のメンバーだったこともあり、私が代表して行事の報告をおこなうことにしたい。



黒田卓研究科長からの挨拶



佐々木肇初代研究科長の祝辞

1. 記念式典

記念行事は、本研究科の教員や学生たちに加え、本学の役員、他学部、他大学、および地元自治体からの多数の来賓をお迎えして開催された。記念式典は、小野尚之副研究科長の総合司会のもと、黒田卓研究科長からの挨拶と来賓への謝辞によって開始され、続いて、里見進総長からの祝辞が植木俊哉理事によって代読された。そのあと、初代研究科長を務めた佐々木肇名誉教授から、研究科創設に至るまでの学内外の流れや、設置に尽力された人々の苦労話などが披露された。創立時の状況を知らない教員や学生が絶対多数となった今、本研究科の原点を見直すという意味から、きわめて意義深いお話であった。さらに佐々木名誉教授の内容を承けるかたちで、小林文生教授（前研究科長）が、創立から現在に至る歩みを詳しく回顧した。直前まで練りに練った内容のご報告で、パワーポイントを駆使した、とてもわかりやすいプレゼンテーションであった。研究科の設置目的、黎明期の様子、公開講座の足跡、国際交流や留学生の受け入れなど、さまざまな側面から辿った研究科20年間の足どりが、詳細なデータとともに紹介された。研究科長経験者両名のお話によって、設立の意義と研究科の使命、および発展の軌跡とが、あらためて我々の心に銘記されることになった。

2. 記念講演

15時30分から16時20分までは、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授で同学部長を務めておられる川崎賢一先生（文化社会学）を講師にお招きし、「文化のグローバル化と日本文化の問題」の演題のもと記念講演がおこなわれた。

講演は主に3つの部分から成るものであった。第一の部分はグローバル化の動向に関する議論である。グローバル化が有する普遍的側面と特殊的側面という視座から、特にアングロサクソン化（金融資本主義・市場個人主義など）の問題が組上に載せられ、また、このところ議論されてきた"Many Globalizations"という論点が変わったのかについても検討がなされた。第二の部分では、文化のグローバル化をめぐる、文化政策的に創造されつつある「文化制度」に焦点が当てられた。文化政策の3類型（アメリカ型・中間型・アジア型）についての指摘のあと、近代化の進んだ都市国家・シンガポールを例に解説がなされた。講演の最終部分は日本文化のグローバル化に関する話題であった。「普遍化の方向」（国際化・トランスナショナル化・グローバル化）

と「特殊化の方向」（ナショナルカルチャーとしての日本文化の内面化）という両様の方向性が提示され、伝統文化としての〈京都文化〉と現代文化としての〈東京文化〉を事例に、前者の〈雑種文化の純粹化の方策〉と後者の〈無味無臭性による発展〉の指摘があり、講演の締め括りとして、現代文化とグローバル化に関する論点（単一化・ハイブリッド化・多文化化）の整理がなされた。

本講演は、次に控える記念シンポジウムと内容的に響き合うものであった。グローバル化と文化の問題を専門とする立場から、シンポジウムで直接または間接に提起されるであろう論点のいくつかを先取りするかたちで提示し、議論の下準備をしていただいたことに心から謝意を表したい。シンポジウムでは川崎先生にも議論に一枚咬んでいただきたかったのだが、時間的な理由から果たせなかったのは残念なことであった。



川崎賢一先生（駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部長）

記念講演

3. 記念シンポジウム

創立 20 周年記念シンポジウムは、学外から 4 名のパネリストと 1 名のコメンテータを迎え、「グローバルizm・日本・国際文化研究」というテーマでおこなわれた。5 名のかたがたは、いずれも本研究科を巣立ち今や独立した研究者として活躍中の俊英たちである。司会は本研究科の佐藤雪野准教授が担当した。

東京芸術大学に勤務するアンドレア・ククリンスキ氏は、日独の叙事詩文学の比較研究から得た知見と経験から、グローバル化時代における中世文学研究の新たな意義を見だし、(逆説的ではあるが) 往古の文学の研究が現代社会の課題である「異文化理解」を導き得る潜在的可能性を有するものであり、かつ分野の孤立化を克服する手段となり得ることなどを論じた。

次に演壇に立った土屋忍氏（武蔵野大学）は、日本文学における「越境」をテーマに、グローバル化と呼応するように登場した「日本語文学」なる概念を引き合いに出し、日本文学（研究）における新し

い状況の出現について、「外地」の日本語文学の研究の活発化などにも言及しつつ論じた。



記念シンポジウム風景

次に発表を行った青木アタヤ氏（仙台市経済局）は、チュラロンコーン大学（タイ）で日本語教育に携わった体験を踏まえ、グローバル化社会における外国語のあり方と異文化間コミュニケーション上の重要性に触れ、タイの大学レベルの教育現場における日本語教育の現状と将来像について豊富な統計資料などをまじえて紹介した。

最後に初山高仁氏（東北大学）は、本学の実学尊重の理念の成立と実際の研究活動の為され方の分析

を踏まえ、創設期の東北大学で国際的な動向を見据え長期的な見通しの下で実用が目指されたことを指摘した。併せ、今後の「国際文化研究」のための課題についても論及した。

これら4名の発表を承け、北原かな子氏（青森中央短期大学）がコメントと質問をおこない、パネリストとの間で熱のこもったやりとりへと発展していった。本研究科の特色をなす学際性や超域性が、さまざまなものが越境するグローバル化時代における文化研究や異文化理解において、いっそう重要性・有用性を増しているというところに議論が収斂していったが、国際文化研究科の将来像を考える上で示唆するところの大きい討論であった。実は、議論が滞る事態に備えて、佐野正人准教授（日本文化展開論）に特別にお願いし発言のご準備をいただいていたのだが、時間的余裕と議論が望外に白熱したことで結果的に佐野先生にマイクを回すことができずじまいになり申し訳なく思っている。

記念行事に引き続いて、午後6時30分から、会場を替えて祝賀会に移り、午後8時に全日程をつつがなく終了した。

参加者の方々、運営に携わった教員と事務方の方々、お手伝いいただいた学生の皆さまに心よりお礼申し上げます。



祝賀会にて小川陽一第二代研究科長の挨拶

なお、今回の創立20周年記念行事の内容は、『国際文化研究科論集』第21号の特集部分に凝縮され公開される運びである。研究科の図書・論集委員会の副委員長として、佐藤研一委員長を補佐して刊行にまで漕ぎ着けることができ、ほっとしている。特集には、黒田研究科長、佐々木初代研究科長、および小林前研究科長の挨拶文と発表内容に続いて、記念講演の全文とシンポジウムの趣旨説明、各パネリストの報告要旨、コメンテータのコメント等が掲載されている。当日出席が叶わなかった方々など、是非一読していただきたいと思う。

第20回国際文化基礎講座の報告

第20回国際文化基礎講座（平成25年11月）では「アジア経済発展の功罪」と題して、本研究科の3教員が日頃の研究の一端を披露されました。

ここにその講演概要をご紹介します。



地域文化の保全と地域経済の発展の狭間で —中国河北省蔚県の伝統工芸品「剪紙」に 対する若者の意識—

木谷 忍（国際資源政策論准教授）

本講座ではまず、地域の伝統文化を持続可能な地域づくりのための資本として理解するために、文化資本という概念を用いて文化的価値を自己同一性（アイデンティティ）から説明した。次に、地域の一つの存在基盤として伝統文化保護への人々の共感を促すためのRPG（ロールプレイング）をデザインする。調査実験では中国の地方小都市である蔚県での伝統工芸（剪紙）を題材とし、地元の若者（高校生）が剪紙職人（経営者）の役割を演じる。

文化資本という概念を初めて定義づけしたのはブルデューである。ブルデューがこの概念を提唱するに至ったのは、学業達成の体系が、社会階層ごとに違った形で子どもたちに現れる理由について研究を進めていた際に、子どもの教育への投資と能力の違いを背景としたベッカーによる人的資本論が、教育活動から生じる学業達成が前もって家庭によって投資された「資本」に依存するという事実を無視していると感じたからである。スロスビーは、文化資本、特に文化的価値と経済的価値の関係に関して、この概念をより明確化した。すなわち、文化資本は、他の資本とは異なった形態を有し、その価値は時間の経過とともに高くなるもので、このような評価は現在世代を超える広がりを持ち、現在の私たちが文化

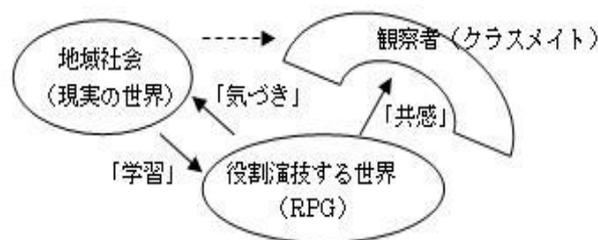
資本に関わる資産を保護し、私たちの継承者たちに適切な形で手渡していく倫理的責任を課すことになると論じる。文化資本（文化財）をその経済的価値からだけで測ろうとすることには問題があり、たとえば無形の文化資本において、それを維持・保持する活動はそれ自体が文化活動であるが、これを経済学の観点から見れば無形文化財の消費活動、または投資行動とみなされる。しかしこのような活動のインセンティブは、経済的見返りではなく、人にとっての地域にとっての自己同一性に関係する。つまり文化資本の劣化は、自己を否定し地域を喪失することに他ならない。

このような経済的価値では測ることのできない文化資本へ気づきを促すために、新しいタイプの RPG（文脈不一致 RPG）を設計した。最初に、蔚県の高校生が地元の剪紙工場の経営方針について議論するために、現実の職人に会って必要な情報収集を行う。図に示すように彼らの演技は、観察者（クラスメイト）の前で行われ、クラス全体の地域経済と地域の伝統文化に対する意識を追った。この RPG での演じると行為は、それを観察する側に着目すれば、演者への共感として評価される。ただし、共感とは演者の考えや意識と必ずしも“同じ”になることを意味しない。観察者自身のそれぞれの経験下で、演者の行為の観察によって疑似的に“体験”することで新たな意識が形成され、その中に本研究で共感（sympathy）として定義づけている共鳴現象が生まれる。

近年の中国は経済発展が著しく、大都市近郊の地域経済も大きく変化してきた。一方で文化・歴史の面では世界有数の大国であり、歴史的な古都（地域）が数多く存在している。中国の地域経済発展の中で、地域文化の維持保全活動が、商品経済と結びつくことは容易に想像できるが、存在として意味のある地域として持続していくためには、地域の文化、そして地域アイデンティティとしての地域への関心は、経済活動とは切り離して保持されるべきであろう。RPG の観察者における意識変化の分析では、将来の中国の地域を担う若者を対象にして、演技者への共感、すなわち地域文化や地域への関心の高まりに注目した。その結果、剪紙が手作りであることの価値意識が高まり、地域経済の発展が著しい中国の地方都市の若者にも、剪紙に限らず、地域の文化遺産保護への政策、地域全体への関心が高まっていくことが確認された。

蔚県の剪紙工場経営に関する今回の文脈不一致 RPG の観察が、演技者への共感を生み、それが手作りの剪紙の維持保全意識に留まらず、文化がもつ芸術性の側面への気づき、地域政策において経済発展と合わせて文化保護の重要性への意識が高まることが確認された。このように文脈不一致 RPG は、演技する者、される者だけに着目するのではなく、観察する者の共感という枠組みから捉えれば、RPG で扱う一

つの題材を超え、それが地域への関心の高まりに波及していく。このように、文脈不一致 RPG は、中国での地域づくりにおいて、近視眼的な発展意識から、地域市民のもつ潜在的な意識（地域文化や地域アイデンティティへの関心）を炙り出す効果があるといえる。



為替相場の決定とそれをめぐる 政策の功罪—日本の例—

横川 和男（国際経済交流論教授）

私の担当回の講座では、為替相場の動きに影響を与える経済的要因についての代表的な考え方を紹介し、為替相場対策として採られる政策に伴う問題について考えました。

為替相場の長期的動向は物価の動向と並行関係にあることが知られています。物価が上がる国の通貨は物価が安定した国の通貨に対して価値が下がります。この関係は購買力平価（通貨が持つ購買力の平衡関係）と呼ばれます。日本で 100 円で買えるものが米国では 1 ドルで買えるなら為替相場が 1 米国ドルあたり 100 円のときに購買力平価が成り立ちます。もし日本でだけ物価が 20% 上がれば同じものが 120 円になります。為替相場が 1 ドル 100 円にとどまれば、1 米国ドルを円に換えて 100 円ですから日本で同じものが買えませんから人々は日本は物価が高いと感じます。為替相場が 1 ドル 120 円になれば平衡関係に戻りますが、1 ドル 100 円のままでドルは安す

ぎで過小評価、円は高すぎで過大評価と感じられます。日本では石油危機以後の時期は物価が比較的安定してきましたので、平行して円の価値は他通貨の平均に対して上がってきました。

ただし、実際の為替相場は購買力平価から乖離します。一人当たり所得水準が高い国では物価高、すなわち通貨が過大評価となる傾向が知られています。ロンドン・エコノミスト誌には各国のビッグマックの価格を縦の軸、一人当たり所得を横の軸にとった有名なグラフが載っています。そのグラフは物価と一人当たり所得の間に正の相関を示しています。

また国際収支の経常収支が黒字である国の通貨は価値が上がっていく傾向があります。経常収支とは貿易収支の範囲を拡張したものです。貿易収支は港や空港を出入りするものの輸出から輸入を差引いたものですが、貿易以外の旅行、輸送、著作物など知的財産権の使用、国境を越えた労働や資本の提供などが盛んになってきたのでこれらを貿易に加えて範囲を広げる必要が出てきました。

経常収支は国全体の対外資産の増減と表裏一体の関係にあります。経常収支が黒字の国は資産を蓄えているかもしくは負債を返済しています。経常収支が赤字の国は資産を取り崩しているかもしくは負債を積み重ねています。経常収支赤字の国から経常収支黒字の国へは富の移転が起こります。どの国の人も資産の多くを自国の資産（自国通貨で価値が保証された預金や国債など）で持つ傾向があります。ですから経常黒字・赤字に伴って黒字国の資産が買われ、黒字国の通貨の価値も上がります。日本では1970年代以後石油危機の時期を除けば経常収支は黒字で円の為替相場も上がる傾向にありました。その経常黒字は1990年代半ばまでは家計部門の貯蓄（貯蓄から投資を差し引いた純貯蓄）が法人部門と政府部門の負の貯蓄を賄ってきたことの反映です。



1990年代半ば以降は家計の貯蓄は経済規模に対し

低下を続け、現在では低水準にあります。これは貯蓄する現役世代に比べて貯蓄取り崩し世代の割合が大きくなったためです。日本の国債は国内で多く消化されているとの指摘がありますが、国内でも家計部門ではなく法人部門の貯蓄が政府による大きな負の貯蓄（赤字）を賄っているのが近年の日本の姿です。法人部門は資金を借り入れて投資を行う、つまり貯蓄は負であるのが通常の姿です。その姿に戻れば日本では財政赤字と経常収支の赤字といういわゆる「双子の赤字」が生じ、その場合には円価値の低下と物価の上昇のスパイラルに転換する可能性もあります。

物価と経常収支以外にも国際取引をめぐる規制の変化、地域的・世界的な政治的・経済的混乱なども為替相場に影響します。例えば日本では1980年代始めに国際投資が自由化されて活発な対外投資が行われたため（石油危機後の経常収支赤字もあり）、円の価値は低下しました。平均的な傾向としては日本では物価が安定し経常収支黒字が続いたので、円は価値が上昇する趨勢にあり、安全通貨とみなされてきました。そのため、リーマン・ショック後のように世界経済の混乱が予想される場合に他国通貨資産から円資産への乗換えが起こる現象も観察されました。

短期的な為替相場の動きは国際資本移動（国境を越えた投資）により大きく影響されます。各時点での通貨取引の大きな部分は国際資本移動によるもので占められているからです。その移動の方向や規模は人々の資産からの収益予想（有利・不利、危険・安全）に依存します。収益予想は資産の将来価値に依存し、将来価値はその時点での人々の資産保有行動によって変動します。資産保有行動は人々の収益予想に依存するので、現在の予想は人々が持つであろう予想に依存するという循環関係が生じます。そのため市場参加者の共有する予想に影響を与える要因は為替相場を含めて多くの資産価格に影響を及ぼします。その要因には経済の将来動向を示す指標、経済政策の変更、政策担当者の交代、担当者による政策表明、それらをめぐる識者の分析、見通しなどがあります。

この資本移動はときには政策の運営を難しくします。国内的には物価上昇やバブルなどの資産価格上昇の兆候があるときには金融を引き締め気味に運営する必要がありますが、同時に通貨価値が急速に上昇するとそれに対処するために金融が緩和気味になってしまうジレンマが生じます。円高対策を求める声が強いときには金融を引き締めることが難しく、そのことが後に国民経済への負担を残すこととなります。また政策は市場の予想に混乱を与えないように、市場との対話を重視しながら慎重に運営する必

要性が一段と高まってきています。

文化と自然の制約のなかで「よりよく」暮らそう！—IPAT公式で表すアジア型豊かさを踏まえて—
ディニル ブシュバール (国際資源政策論教授)

この講座では、自然の制約と文化の恩恵のなかで、我々はどのようにしたら「よりよく暮らす」ことができるかを検討した。本講座では「自然の制約」は地球のバイオキャパシティとエコロジカル・フットプリントから検討すると共に「よりよく暮らす」ことを人間開発指数をもとに考えた。エコロジカル・フットプリントは、ある集団が自然に与える“負荷”の計測法の一つである。人間開発指標は「健康で長生き」でき、「教育」が受けられ、「人間らしい水準の生活」が送れるかどうかを算出した指数である。一般的に我々はより多くの資源を使用すれば、快適な生活を送ることができると考えられている。

エコロジカル・フットプリント (EF) とは、個人、国、地域が消費する資源を生産し、その過程で発生する廃棄物を一般的な技術を用いて吸収するうえで必要な、生物学的生産のための陸地および水域の尺度である。EF は、グローバル・ヘクタールという単位を用いて表される。1 グローバル・ヘクタールは、世界の平均的な生産力で生物学的生産が行える土地 1 ヘクタールに相当する。

一方、人間開発指数 (HDI) は、人間開発のレベルによってその国をランク付けする際に使われる指標であり、HDI はまた、その国が先進国、開発途上国、のどれに属するかを示す。これは、世界各国の出生時平均余命、識字率、就学率、1 人当たりの GDP の各要素の指標の平均を結合して算出する。HDI は、人間開発を評価する標準的な方法とされており、教育、保健医療、収入、雇用等の機会が人々の豊かさにつながるものだと仮定している。HDI は基本的に各国の開発の度合いを測るために用いられる。

我々がより多くの資源を使えば、我々の生活はより快適になるということは想像に難くないだろう。実際に、エコロジカル・フットプリント (EF) が高い国々は、人間開発指数 (HDI) が高い。しかしながら、我々が持続可能な開発に近づく必要があるならば、HDI を大きくしながら EF を小さくすべきであることに留意しなければならない。

講座の後半では、規模 (経済の大きさ)、構成 (ひとつの経済圏で生産および消費される商品およびサービス) および技術間の関係を検討し、更に、IPAT 公式を通して、それぞれの要因が環境負荷に与える影響を検討した。我々は、環境負荷に対する A (豊かさ) の寄与、および異なる文化、特にアジアの文化において豊かさとはどのようなものかを分析した。豊かさの価値が高いことは、世界の人口の大多数に

とっては高い資源集中を意味するが、一部の個人にとってはより精神的な意味を持つ。

IPAT 公式の特徴として、環境負荷が、数 (量) としての属性をもつ「人口の項 (P)」と、種類としての属性をもつ「豊かさの項 (A)」、関係としての属性をもつ「技術の項 (T)」の三つの因子の相乗的關係から「環境負荷 (I)」を求めることで、環境への影響を広範囲な要因で考慮することができ、要因の相互関係を評価することが可能になると考えられる。

この公式に従って、単純に環境への影響 (負荷) を減らすには、人口 (利用回数) を減らすか、消費を減らすかの選択となる。消費を減らすには、豊かさ (ライフスタイル) を犠牲にするか、豊かさの実現に伴う環境負荷を増やさない技術を選択するかの二択となるが、生活の質の改善を考えたとき、豊かさの後退は人々に受け入れられにくい選択であり、技術による対応が重要な意味を持つてくる。また、環境への影響の大きさは、自然の回復力に関係することから、消費の絶対量とともに、消費の速度が重要であり、環境への影響を低減するためには、消費速度を環境の回復許容速度内に収める技術の選択が求められてくる。

高い収入と幸福の関係はどうであろうか。富裕国において一定の収入を大きく上回ることは人々のウェルビーイング (安寧、幸福、福祉、健康の状態) の意識に影響を及ぼさない。様々な目的は経済成長によって達成できるものだと信じられている。しかし、経済成長は、人間関係の面では人々を満足させることができないため、経済成長は幸せを増大させることに殆ど寄与しないと見え、日本のような豊かな国では、成長に依存することなく目的を達成することができる。最後に、我々は、日本のような先進国において経済成長とは関係なく豊かになるためのありかたを検討した。この講座の目的は、単に議論の種を蒔くことであり、議論を完結させることではない。



国際文化研究科主催行事の報告

国際文化研究科講演会 Ali Ferdowsi氏 講演会 黒田 卓 (イスラム圏研究講座教授)



平成 25 年 7 月 24 日に、米国カリフォルニア州のノートルダム・ドゥ・ナムュール (Notre Dame de Namur) 大学歴史学・政治学学科教授、アリー・フェルドウスイー教授をお迎えして、「19 世紀後半ハージ・サイヤーフ (Hajj Sayyah) の世界観」と題する講演会を研究科主催で開催しました。これは JETRO・アジア経済研究所が招聘した同教授が、かつて 19 世紀後半に 18 年間にわたって世界旅行を敢行しその記録を残した一人のイラン人知識人について研究されたことがあり、この研究テーマが国際文化研究という学際的分野に相応しく是非本研究科で講演をやってみたいとのご希望で実現したものです。

先生のご講演は、おもに 3 つの部分から構成されていました。ひとつは、19 世紀というモダンティエが地球規模で拡張する時代に、異文化を観察して、旅行記という媒体の中で語るというのはどういう意味があり、どのような視点から分析することが可能かという問題提起的な部分でした。90 年代初めに 3 年間日本に客員研究員として滞在経験がおありで、忠臣蔵や谷崎潤一郎の『春琴抄』のペルシア語訳を出版されているフェルドウスイー先生は、柄谷行人の私小説論にも言及しながら「近代的主体性」の形成という観点が重要であり、なかでも「パフォーマンス性」に着目する分析方法を採る意義を強調されました。次に、先生は講演の主人公であるハージ・サイヤーフ (ca1836~1925、サイヤーフは「旅行者

という彼の通り名) の生涯と業績を概観されました。伝統的な宗教諸学の勉強を積んでいたサイヤーフは 20 代前半で中部イランの田舎町を出奔し、ロシア、ヨーロッパ、北米そして太平洋を横断して日本、アジアを放浪の旅に出ます。日本には 1875 年夏に横浜に到着しましたが、その頃にすでにそこにはイラン人同胞が滞在していたという大変興味をそそられる記述があることを紹介されました。加えて、自分は日本語読解力不足からこの点を深く掘り下げられなかったが、この辺りの歴史背景の解明はまさに国際文化研究の名に値するのでは、とコメントされました。最後に、旅行記に見られるエピソードを、時間の関係もあり 1、2 例のみ取り上げられました。とりわけアメリカ合衆国大統領、グラントとサイヤーフが会見し、市民権の取得をめぐる交わした会話分析を試みました。市民権が「近代的主体性」の観点からいかに語られるかをめぐる解釈は、本講演の白眉であったように思われます。

このサイヤーフという人物はイランに帰国後、折しも国全体が王政の専制や腐敗から脱却し、近代的な国家へと生まれ変わろうとしていたイランで思想的にも、また実践的にも顕著な役割を演じただけに、大いに刺激的な講演会であったといえます。また、通訳の方を介して、限られた時間でしたが活発な意見交換も行われました。

国際文化研究科講演会 細谷 行輝 氏 講演会 寺本 成彦 (ヨーロッパ文化論講座教授)



平成 25 年 11 月 1 日、大阪大学教授、細谷行輝先生による講演「デジタル教育改革 e-Learning によ

る最先端の言語教育システム『WebOCM next』の可能性』を開催した。語学教育界で近年注目を集める e-Learning において先進的な役割を果たしている大阪大学サイバーメディアセンターで開発・活用されてきた Web4u の後継ソフト、WebOCMnext の紹介を中心に、e-Learning の今後の可能性についてお話ししていただいた。

最近から話題を集めている大規模公開オンライン講座「ムーク」(MOOC: Massive Open Online Courses) の可能性と問題点を明快に指摘された後、学習者に対していわば「強制力」として働くような優れた教材・ホームページの必要を指摘され、それに関連して新たな e-Learning である Web OCMnext について説明いただいた。具体的には、「言語教育に特化した LMS (辞書の充実化)」、「自己弱点克服機能」、「評価機能を備えたコミュニケーションツール」(メール通知、オンライン通知機能も兼備)、「学習管理機能 (出欠・成績などの管理)」などである。また WebOCMnext に備わった「グモー」(GMO) 階梯による利用タイプの事前設定 (初級・中級・上級) により、学習者は自己のレベルに合致した学習を自主的に進め、さらに自分向けの単語テストをコンピュータに作成させることで、自己の習熟度チェックを効果的に進めることも可能になるということである。教師の負担を極限まで減少させながら、個々の学習者により適合した個別の学習メニューを提供するという e-Learning の使命の達成に向けた大きな一歩であると感じられた。

なお本講演会は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤 (C)「Web4u を活用した初級・中級フランス語 e-ラーニング教育の応用的研究」(代表: 米山親能) の招聘によるものである。

国際文化研究科講演会
Edwina Palmer 氏、伊藤 雄志氏 講演会
江藤 裕之 (言語文化交流論教授)

2014 年 1 月 24 日、ニュージーランドの Victoria University of Wellington より、日本語・日本研究をご専門とされる Edwina Palmer 先生、伊藤雄志先生をお招きし、「海外における日本研究: ニュージーランド」と題した研究科主催の学術講演会を開催した。

英国生まれの Edwina Palmer 先生は、ニュージー

ランドに移られて 30 年以上、大学で日本語、日本史、日本文学を担当されている。ご専門が、古代日本の文学、神話学で、特に播磨国風土記の研究ということもあり、今回は「古代日本語に見える隠語—播磨国風土記を例として」というテーマでお話しいただいた。今日でも隠語 (slang、argot、jargon) はいろいろなところで使われているが、言霊の信仰、つまり、ことばに霊力を感じていた古代の日本では、それが豊富であった。あることばの音や意味からイメージ (連想) をひろげ、それがさまざまな意味へと広がっていく。一例として、播磨国風土記の「播磨」とは、「針間」、つまり野原に力を込めて鉄のくわを入れるという意味で「墾る間 (開墾する間)」に由来すると説明された。さらに、「はりま」は「孕む」とも関係があり、開墾することでそこが実り豊かな土地 (原) となるのが、女性の孕む腹とかけられたという。これは、まさにことばの謎解きであるが、単なる思い付きや空想でなく、古代の文献や文化史的な傍証に基づいた学説ということで、非常に興味深い内容であった。



Edwina Palmer 先生

次の伊藤雄志先生は、実は、東北大学理学部のご卒業で、今回、久しぶりに川内キャンパスにお戻りになられたとのことだった。自分の記憶とは全く異なっており、川内郵便局がわずかに昔の姿をとどめているだけだと言っておられた。伊藤先生は、科学史で学位を取得され、その後、思想史、特に日本の思想史へと研究を進められた。その傍ら、オーストラリア、ニュージーランドの諸大学で日本語を教授されてきた。ご専門は、近代日本思想史と日本語教育である。伊藤先生からは、「明治大正時代の国民教

育と武士道論—危機における自己犠牲と禁欲」というテーマでご講演をいただいた。先の東日本大震災の際に、日本人が見せた冷静さと秩序ある行動は、世界から称賛を受けたことは記憶に新しい。伊藤先生は、その日本人の中にある独特の規律はいわゆる「武士道精神」にあるとされながらも、津田左右吉、新渡戸稲造、井上哲次郎、朝河貫一、山路愛山らの武士道論を紹介され、批判的、実証的に「武士道精神」を分析された。その結果、武士道精神には、自己犠牲と禁欲、そしてその裏側にある傲慢さと忠誠の強要という二面性があることを指摘された。



伊藤雄志先生

お二人のご発表は、日本、日本人、日本語、日本文化をあらためて考え直す機会だけでなく、1つの有効な視点を与えてくださったように思えた。今後もこのような形で「海外における日本研究」の講演を継続して行っていきたいと考えている。あわせて、お二方の先生には、前日（1月23日）に、言語文化交流論講座・言語コミュニケーション論講座の共同主催で「ニュージーランドにおける日本語教育の実際」というテーマでお話しいただいたことも付記しておく。

国際文化研究科関連行事
市民講演会
「海域交流から見た日中文化交流」
勝山 稔（アジア文化論講座准教授）

2013年10月13日（日）、東北大学国際文化研究科・帯広市図書館共催の帯広市民セミナーが、帯広市「とかちプラザ」視聴覚ホールで開催された。講師はアジア文化論講座の勝山稔准教授のほか、アジ

ア文化論出身で東北大学高等教育開発推進センターの井上浩一講師、そして比較文化論出身で長春理工大学外国語学部の城谷妙子講師も中国から来日し、合計3名がセミナーを担当した。



本年度5回目となる帯広市民セミナーであるが、今年は勝山と井上が参加している文部科学省科学研究費（基盤研究B）の成果発表も兼ねて、3年間に於ける研究の成果を一般市民に紹介することとなった。今回の発表テーマは「海域から見た日中文化交流」として、近年中国研究で注目されている文化交流における「海域」の存在に着眼し、史学・文学・語学という異なる視点から多角的に日中文化交流をアプローチした。その内容は（1）フェルナン・ブローデル（Fernand Braudel）による地中海文化の研究手法を東アジア地域に援用した日中海域交流の動向、（2）中国から日本への海域交流の事例として『西遊記』の受容事例、（3）日本から中国の海域交流の事例として魯迅作品に見える日本語の事例を発表した。

当日は70名の参加者があり、セミナーの前後では帯広市図書館副幹事の鈴木恵さんによる司会進行で各講師とのディスカッションも行われ、我々の日常に何気なく存在している事物・文物が日中文化交流の歴史の結果によって日本に根付いていた事例が様々紹介され、講演終了後は参加者から活発な質疑応答が行われた。参加者の反応も非常に良く、セミナー後のアンケート結果でも上々の評価を得ることができ、大変収穫の多い内容となった。

事務局より連絡

新コーナー開設のお知らせ

同窓生相互の繋がりを深めることを目的に、同窓生の方々からの近況報告や情報提供等をお寄せいただき、掲載するコラムのコーナーを次回発行の同窓会会報に開設します。

ご意見・ご提案等同窓会事務局まで、お寄せくださるようご案内いたします。

①同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

②メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会

< dosokai@intcul.tohoku.ac.jp >

③同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/dosokai/>

④同窓会懇親会について

事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑤ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑥会費・寄付金の納入のお願い

会則第 11 条第 1 項及び 12 条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：6,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者：8,000円

進学者：6,000円

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口にご納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-66621